

書 評



大場千景 著

『無文字社会における歴史の生成と記憶の技法
—口頭年代史を継承するエチオピア南部ボラナ社会—』

清水弘文堂書房 2014年、431ページ、7000円＋税

野口真理子

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

本書は、著者が2011年に総合研究大学院大学文化科学研究科に提出した博士論文を加筆・修正したものであり、無文字社会に生きる牧畜民ボラナが約6世紀にわたり語り継いできた膨大な口頭年代史を詳細に分析したものである。

エチオピア南部に居住するボラナは、ガダと呼ばれる年齢階梯制度をもつ。ガダは8つの階梯に分けられ、そのうち第6番目の階梯にあたる人びとのなかから、ガダの父 (*abbaa-gadaa*) と呼ばれるリーダーが選ばれる。ガダの父は8年間、ボラナ全体の政治や儀礼の執行に責任をもつ。ボラナの人びとは、歴代のガダの父70人を年代順に並べて記憶し、それぞれのガダの父の治世における出来事を語る。本書で取り扱われる口頭年代史とは、このガダの父の年代表にもとづいて編年化された、過去の出来事に関する歴史語りのことである。これはボラナの言葉でアルガ・ダゲーティと呼ばれる。アルガ・ダゲーティを語ることは、ボラナにおいて政治的優位性を確保するために重要で、その語り手は限られている。著者は2007年から、46人のアルガ・ダゲーティ保持者たちと対話し、彼らの歴史語りを録音、収集してきた。以下に、本書の構成を示しておく。

序章 歴史をめぐるふたつの視点

- 0-1 口頭年代史を継承する社会
- 0-2 先行研究の概観
- 0-3 人類学的歴史の探求
- 0-4 調査方法と本書の構成

第一章 口頭年代史を読みとくための基本情報

- 1-1 ボラナの生業
- 1-2 ボラナの社会と宗教

第二章 口頭年代史の背景

- 2-1 ボラナにおける口頭伝承の種類
- 2-2 アルガ・ダゲーティをもつ人々の社会的背景
- 2-3 語りの場と口頭年代史の生成、その聞き手たち

- 第三章 口頭年代史のカテゴリーとパターン
 - 3-1 口頭年代史における語りのカテゴリー
 - 3-2 口頭年代史にみられる語りのパターン
- 第四章 社会変動を超越する技法としての予言者物語り
 - 4-0 予言者と「歴史」
 - 4-1 ラーガとよばれる人々
 - 4-2 社会変動とラーガ
 - 4-3 予言・呪術成就史観
- 第五章 詩と歴史記憶
 - 5-0 記憶しやすい型にもとづいた思考法
 - 5-1 「歴史」化される英雄物語
 - 5-2 記憶装置としての詩
 - 5-3 詩が生成する複数の「歴史」
 - 5-4 詩の消失と歴史語りの喪失
- 第六章 ボラナにおける歴史記憶の構造
 - 6-0 解釈の様式としての構造
 - 6-1 マカバーサという言説
 - 6-2 構造化される出来事
 - 6-3 歴史記憶の固定と創出
 - 6-4 歴史記憶の構造と循環的時間
- 終章 社会構造と「歴史」への意志
 - 7-0 歴史記憶の生成と継承を可能にする三つの技法
 - 7-1 王をもたざる社会と歴史記憶
 - 7-2 政治的闘争の場としての歴史記憶
 - 7-3 権力と「物語り」への希求の産物としての歴史記憶

序章で述べられているように、これまでの歴史研究においては、口頭伝承を重要な資料と位置づけながらも、民族の歴史を実証的に再構成するために、非科学的な当事者たちの解釈の一部を「不純物的語り」として排除してきた。近年、この実践主義的な歴史学の方法論に対しその限界が指摘されるようになり、同時に、歴史研究に人類学的視点を組み込んだ新たな方向性がうちだされている。すなわち、口頭伝承を保持してきた人びとが信じる「歴史」を叙述することで彼らの過去への認識のあり方、その社会の世界観や信念の体系を明らかにするというものである。著者もまた、互いに矛盾する可能性をはらむ、ローカルな歴史実践と実証主義的な歴史叙述のふたつの視点のあいだに立ち、「実証主義的な歴史叙述すらもまたローカルな歴史実践のひとつであるとする、より人類学的な視点」から、無文字社会に生きるボラナの人びとの「歴史」が生成・継承されてきたメカニズムを解き明かすことを通して、「当該社会のもつ文化的な思考法や世界に対する認識のあり方」を明らかにした。

第一章では、ボラナ社会の概要について、特に口頭年代史を理解するうえで必要な、社会組織や儀礼などに関する基本的な情報がまとめられている。ボラナは、クランごとに自治をおこない、それぞれが自律した政治システムを持っている。ガダは、そのクランを横断してボラナ社会全体を統括する政治システムの基盤となっている。

ボラナにおいて「歴史」に関する伝承は、ガダと深いかかわりをもつ人びとを中心に継承されてきた。第二章では、ボラナの口頭伝承におけるアルガ・ダゲーティの位置づけ、語り手の社会的背景、そして語りの場と聞き手について論じている。アルガ・ダゲーティ保持者の多くは、過去にガダの役職者など政治の中心を担う人物を何人も輩出してきた有名なリネージの成員であったことが明らかにされている。また女性は語り手にはならず常に聞き手であること、若者は学校教育などの理由で町場に住んでいるため語りを聞く機会に恵まれないことも指摘されている。語りの場における若者の不在によって、アルガ・ダゲーティ保持者の多くが、今後語り継がれなくなるかもしれないという危機感を感じているという。第二章では他に、録音をはじめとする新たな記録媒体の登場によって語りの形態や場が変化していることも述べられている。

第三章は、口頭年代史における語りの内容をカテゴリー化し、また実際に語られる際の語りのパターンを分析した章である。著者は、聞き取りをおこなった46人のうち、時代を同定しながら出来事を詳細に語った14人の語り手から収集した歴史語りの内容とその語り方を検討した。ボラナの口頭年代史は、他民族との紛争に関する話題、旱魃・異常な降雨などの天災に関する話題、ガダの父・英雄や賢者などの人物談、そしてボラナ内部での争いに関する話題が、全話題の大部分を占めており、これら4つの話題が中心となって口頭年代史が構成されていることが明らかになった。また、口頭年代史の語り方には、以下の4つのパターンがみられた。すなわち、(1) 文化的災因概念を背景に、出来事の生起を法則的に語るパターン、(2) 合言葉のように定型化した言いまわしや、詩・詩的台詞が挿入されるパターン、(3) ガダの父の出自など、継承の正当性と社会にとっての不幸な出来事の関係に言及し、出来事を政治に巻き込むパターン、そして(4) 筋書き自体がある程度標準化・定型化した語りを、別の時代に生起した出来事に対して転用し、同一の筋書きをもつ類似した出来事として語るパターンである。語り手はこれらのパターンを選択・組み合わせて出来事を語る。それぞれの語り手が語る「歴史」には多くの一致がみられるが、採用するパターンの違いによっては、語りの内容や取り上げる出来事が多様化してしまうという。著者は特に、(4)の語りの転用事例の一部において、時代の同定における「間違い」または「記憶違い」ととれるような語りの存在を指摘する。例えば多くの語り手によって時代が同定されている出来事を、一部の語り手が別の時代の出来事として語るものである。著者はこれらの語りについて、語りの技法や年代を同定する規則の存在を裏書きするものと指摘している。

第四章から第六章までは、歴史語りのなかで頻りに言及される予言者ラーガ、詩的句群、そしてマカバーサという文化的災因概念に着目し、出来事を「歴史」にする記憶のメカニズムについて考察している。第四章では、「ラーガに関する具体的な歴史語りを分析」することで、予言者物語りの歴史記憶における役割について考察している。ラーガは、ボラナ社会の未来を予言する者として、紛争や天災、内紛など、ボラナ社会を揺るがすような出来事の生起に関する説明者として、または自らの呪術によってその出来事を引き起こす動因者として、口頭年代史に頻りに登場する。ラーガの予言は、語り手の省察が加えられながら再解釈され、コンテクストを変えて登場することもある。ラーガの予言を聞き入れて行動したかどうかで危機的状況を克服できたかどうか語られる。つまり、口頭年代史においてラーガの挿話は、未曾有の出来事を必然的な「歴史」として解釈・超克するためのひとつの技法となっているのである。

第五章では、「声の文化」に属する人びとの思考のあり方と歴史記憶の形成とのかかわりについて、歴史語りで発話される詩に着目し、明らかにしている。韻のつながりを重視し、リズムカルで変形されにくいという特徴をもつ詩は、人びとの記憶に染み込みやすい。このような詩的句をたびたび発話する技法は、ボラナの口頭年代史がある程度の一貫性を保つための記憶装置となっている。しかしながら、句は、それだけでは意味が不明瞭である。その句が生成した「歴史」的コンテクストの理解に応じて、句はいかようにも解釈され、語り手の間で異なる歴史記憶が生み出される可能性があるという。

さらに、第六章では、規則的サイクルによってガダの父に振り分けられる「ガダの父のマカバーサ」という文化的災因概念に焦点をあてている。ガダの父には、年代に沿ってそれぞれに意味をもつ7つのマカバーサが順番に付与される。例えば、7つのマカバーサのうちのひとつめであるフラーサが与えられたガダの父の治世には、ボラナ内部および他のエスニック・グループとの紛争の運命があるとされる。同じマカバーサが付与されたガダの父の時代には、同じ運命がプログラムされたかのように生起すると考えられているのである。著者はこれをマカバーサ・サイクル史観と呼び、このような循環的規則のもとで、これに合致するような出来事が取捨選択され、歴史記憶の一致性を高めてきたと分析している。ただし、このマカバーサ・サイクル史観による歴史記憶の取捨選択はしばしば誤作動をおこし、先に述べたような出来事の生起した時代の同定における「間違い」や「記憶違い」と結びつくことで、まったく新しい「歴史」が創出されることもあるという。ここではまた、このマカバーサ・サイクル史観をもとに、彼らは未来に起こる「ボラナの歴史」についても語ることに、そして彼らの歴史記憶に内在する、ボラナの観念的時間概念についても言及している。

著者は最後に、ボラナの人びとは、なぜ以上のような複雑な技法をもって「歴史」を構築・維持してきたのか、またはしなければならなかったのだろうかという問いを投げかける。この問いを解明するため、終章では、ボラナに歴史記憶が存在する意味について、年齢階梯制度ガダとの関係から考察をおこなっている。集権的政治構造をもつ社会は、歴史への意志を強くもつという川田 [2004] の指摘に反して、ボラナ社会は非中央集権的であるにもかかわらず「歴史」を構築・維持してきた。この点について、著者は、「王朝をもつ社会に限らず、集団を統合化させるなんらかの組織をもつ社会」には、「歴史」を構築し、維持しようとする意志が働く」のではないかという仮説を提示している。ボラナは他民族との紛争を繰り返しながら、ガダを中心にきわめて凝集性の高い社会を維持してきた。その一方でガダやクランの役職者間、または半族やクラン同士の対立など、集団内部での分裂への志向性も持ち合わせていた。これらを背景に、彼らが「社会が存立するための正当性と安定性」を確保するための「歴史」への意志」をもち、現在の歴史記憶の構造を形成してきたのではないかと著者は論じている。政治的優位性を確保するために、リネージの正当性を主張する方法としてアルガ・ダゲーティが語られ、リネージの保身的語りと敵対リネージの秘密の暴露を繰り返しながら、「歴史」が明らかにされる。このような過程で明らかにされたその「歴史」には、ある程度の不一致はみとめられるものの、結果として高い一致性をもち、集団に凝集性をもたらしているのである。しかし一方で、政治的中核にあるリネージの成員以外の人びとにとっては、リネージの歴史的な正当性よりも、破局的な出来事の生起に必然性を創出することの方が重要なのではないかと指摘する。本書を通して明らかになったボラナの「歴史」の生成と記憶の技法は、不条理のなかで安寧を保って生きていくために欠かせないものであった。つまり彼らは、世界で生起する現象の仕組みを説明するような文化的「物語り」を生み出してきたのである。この「物語り」の希求も、ガダの永続性の確保に寄与してきたと著者は結論づける。

しかしながら、本書で取り扱った「ローカルな歴史実践」は、口頭年代史アルガ・ダゲーティの分析にもとづくものであり、これを語ることのできる者は一部のボラナである。そしてそこには複数の「歴史」が存在しうる。ここから導き出された「文化的思考法や世界に対する認識のあり方」をボラナ社会に通底するものとして理解するためには、やはりその他大多数の、アルガ・ダゲーティを聞くだけの、また聞く機会が限定されている「一般の人びと」にも注目する必要があるだろう。ここに、口頭年代史研究の限界があるといえるのではないだろうか。特に、著者自身も言及しているが、「歴史」を語ることのない「一般の人びと」は、さまざまな破局的出来事を「歴史」に言及せずとも文化的災因概念のみ、もしくは新たな思考法をもって説明することが可能であると考えられる。とはいえ、「歴史」が語られることで不条理をより必然的に、そして説得的に説明することができ、語り手や聞き手の「文化的思考法や世界に対する認識のあり方」、そしてガダの永続性がこれに支えられてきたということは確かであろう。そして本書で提示された彼らの歴史認識や時

間概念は、実証主義的な歴史学のアプローチからも、あるいはこれまでのボラナ研究で主流であった生態・社会人類学的アプローチからもみえづらかった部分ではないだろうか。この意味において、当事者たちの解釈が入り混じるローカルな視点を調和・共存させるかたちで歴史叙述をおこなった本書のアプローチは非常に示唆的である。ボラナの口頭伝承はアルガ・ダゲーティだけではない。ボラナ社会における「実証的な世界観」を究極的には叙述したいという著者の、今後の研究の進展に大いに期待している。

最後に、本書の魅力のひとつとして、膨大な歴史記憶を長年にわたり語り継いできたボラナの豊かな「歴史」を構成する歴史語りの一部が、巻末に資料として収録されていることを挙げておきたい。これらは直訳に近い形で翻訳されており、ボラナの老人たちの語り口やその内容に読者が直接触れることができる。短いものは1、2行、長いものでは数ページに及ぶ語りの長短、内容の濃淡、またそれぞれの語り手がひとつの時代についてどのように語っているかを、実際に読者自身が読み比べることができる。これは著者以外の研究者に原データの参照可能性を確保することを目的とした配慮でもある。実際に読んでみれば、ボラナにおける歴史語りに、ある程度の不一致性を内包した一致性が確保されてきたことや、本書の冒頭で述べられている、著者が調査の上で感じた「歴史のツボ」、すなわち、過去無数に起きてきたであろうさまざまな出来事のなかで、「ある種の出来事に対してはツボにはまったように語りが尽きない」様子が伝わってくる。複雑なボラナの社会構造やそれに関わる用語などはやや難解な印象を与えるが、無文字社会ボラナの豊かな「歴史」とその「歴史」を構築・維持してきたボラナの歴史実践を垣間見ることのできる一冊となっている。

参考文献

川田順造、2004、『アフリカの声―「歴史」への問い直し』青土社。

(のぐち まりこ)